

CLOSE-UP  
INTERVIEW

株式会社 山上木工 専務取締役

# 山上裕一 朗さんに聞く

ローカルの強みを生かして  
日本の優れたものづくりを  
世界に向けて発信する

「聞き手」川島葵さん フリーアナウンサー

やまがみ・ゆういちろう

1984年生まれ、北海道津別町出身。芝浦工業大学工学部・機械工学第二学科(現、機械機能工学)卒業。工作機械メーカーDMG森精機株式会社を経て、2013年に津別町にUターンし、「株式会社山上木工」の専務取締役に就任。2020年には「株式会社The Goods」の代表取締役に務める。

## 製造業に関わるべく 機械工学を学ぶ

**川島** 本日は北海道・津別町から世界に羽ばたく木工所、株式会社山上木工の専務取締役である山上裕一朗さんにお話を伺います。山上木工は「東京2020オリンピック・パラリンピック」のメダルケースを製作したことで、その名が世界に広く知れわたることとなりました。

**山上** おかげさまで様々なメディアやSNSで取り上げていただき、弊社の認知度を高めることができました。

**川島** 私もテレビでメダリストたちがメダルをケースから取り出している様子を見てとても感慨深かったです。そこに至るまでに紆余曲折や色々な経緯があったと思いますが、後でたっぷり伺うとして、まずは、山上さんの出身地であり、山上木工の所在地である津別町がどんな所なのか教えていただけますか。山上木工のように木工製品を製造している工場も多いのでしょうか。

**山上** 津別町は地域の86%が手付かずの森林になっている小さい町です。ちょうど東京都23区と同じくらいの面積に、たった4300人しか暮らしていません。主な産業は一次産

業です。林業や製材業が盛んで、大きな木材メーカーがあります。農家も多く、ジャガイモやタマネギの名産地となっています。我々のような二次産業の木材加工メーカーは実は珍しくて、2社しかありません。

**川島** 豊かな自然に恵まれた津別町で生まれ育った山上さんですが、自然の中を駆け回るような子ども時代だったのでしょうか。また、芝浦工業大学への進学を機に上京されましたが、高校時代は進路や将来についてどのように考えていらつしやったのでしょうか。

**山上** 子どもの頃はすぐ近くの裏山で遊んだり、川遊びをしたり、冬はスキーをしたり。勉強もせず以外で遊んでばかりいた記憶があります。高校時代は家業を継ごうという意識はありませんでしたが、父が機械を使っものづくりをしている姿が頭に残っていたためか、なんとなくプロダクトに関わる仕事をしてみたいと思っていました。そこで、幅広く機械や製造について学べそうな芝浦工業大学を選びました。

**川島** 工学部機械工学第二学科(現在の機械機能工学科)に進学されたそうですが、具体的にどのようなことを学ばれたのでしょうか。

**山上** 機械力学や材料力学など、ものづくりの基礎を学び

ました。最初は理解が追いつかず苦労しましたが、友人たちと一緒に勉強したりしながらなんとか授業についていくことができました。当時の友人は今でもつながりが強く、同業者も多いので、仕事の相談などでよく連絡を取り合っています。



山上 裕一郎さん

## 自信を打ち砕かれた社会人生活

**川島** 工作機械メーカー、DMG森精機株式会社に就職して三重県に移られましたが、就職先として森精機に決めた理由を教えてくださいますか。また、森精機では具体的にどのようなお仕事をされていたのでしょうか。

**山上** 工作機械だらけの町工場で育ちましたから、馴染み深い業界でした。グローバルワンを目指して成長しているという活力に満ちた会社だったことも魅かれた理由です。入社当初は、数値制御で工作を行う横形マシンングセンターの製造と設計を担当し、海外で仕事をする機会も増えまし

た。DMG森精機の機械は世界中の工場で導入されているのですが、故障が出た際に状況を確認して修理の方向性を提案するなどの業務を行っていました。その時期に、海外で日本の製品を高く評価する声をたくさん聞くことができました。DMG森精機のおかげで、メイド・イン・ジャパンの素晴らしさを実感する機会と世界に視野を広げるきっかけを得られたと思っています。

**川島** 順風満帆な社会人生活を送っていらっしやっただけですね。

**山上** それがまったく違うんです。社会人生活の中で多くの方が経験することかと思いますが、入社当初は能力不足でたくさん叱られて落ち込むことが多かったことを記憶しています。しかし、諦めずに技術を磨いているうちに仕事にも慣れてきて、大きな仕事も任せられるようになり徐々に自信もついてきました。いま思えば、そんな小さな、20歳代で掴む根拠のない自信を持ったことで後々、随分と苦労しました。

**川島** 一体何が起きたのでしょうか。

**山上** 30歳を前にして転職を考えていたある時、父と電話で話す機会がありました。その時に父が休みなく一生懸命働いていた姿を思い出して、いまの自分なら父の会社の役に

立てるのではないかと思ひ、津別町に戻り、山上木工に勤めることを決意しました。

**川島** 〆自分の培ってきたものを、故郷に戻って父の会社に還元するぞ〃という熱い想いがあつたんでしょね。

**山上** まさにそういう想いの塊でした。しかし、それは思い違いで、実際に山上木工に入社してみると、自分にできることが何もない。結局、前の会社を離れたら何もできない人間だったんです。大きな組織にいと気づかないですが、会社の歯車の一員として自分の歯車を磨いて精度を上げることに専念するものの、その歯車は単品だと役にも立ちません。小さい会社だと多少粗くても自ら歯車を何個も持つことができるほうが良い場面が多いのが現実です。

## 生まれ故郷を次の世代につなげたい

**川島** そんな状況の中で仕事をしていくうえで、大切にしてきたことはありますか。

**山上** 30歳という年齢で戻ったので、そこから職人を目指すことは現実的に難しいことでしたから、体をとにかく動かし学ぶことに専念しました。そしてとにかく誰よりも早

く出社して、最後に帰るようになりました。あとは掃除を率先してやる。働き方改革が叫ばれていますが、職人の世界ではこれが重要なのです。そして、我々は木材加工の日本一を目指していこうと考える一方で、父の仕事に対してリスペクトを忘れないようにすることも意識しました。父が40年以上頑張つて経営してきた実績こそが会社としての一番の説得力ですから、尊重するようにしています。

**川島** お父様や先輩の職人の方々を大切に思いつつも、自分ならではの取り組みに挑戦されたと思います。最初はどんなことから始められましたか。

**山上** まずは父が苦手な分野であるWeb系の会社のホームページを更新することから始めました。簡易的なホームページしかなかったので、きれいに整えて父のしている仕事がいましっかり伝わるように改善を行いました。また木工職人の現場作業に携わる一方前職の経験を役立てられる場面もありました。山上木工はNC(数値調整)加工に非常に強い会社ですが、



川島 葵さん

機械が故障すると修理に数百万円かかることもありま  
す。しかし、中古パーツを探したり、海外から仕入れたりし  
て自分で修理することで、コストを数万円まで下げること  
ができています。

**川島** 大学で東京へ、就職で三重に行かれた後に、故郷に戻ら  
れたわけですが、改めて見た津別町の印象はいかがでしたか。

**山上** 戻った当初は、昔の仲間たちの多くが街から出てし  
まっているし、他に深いつながりのある人もいない。元々、小  
さい街で人口も少ないですが、本当に寂しい街だと感じる  
こともありました。

**川島** 山上さんはローカルでも戦えるという考えを大切に  
していらっしゃるようですが、そうしたネガティブな印象を払拭  
するために努力されたことがあるのでしょうか。

**山上** そんな状況だったからこそ、自分たちの生まれ故郷  
を次の世代にしっかりとつなげていきたいという想いが強くな  
りました。そのためにはもっと自己肯定感であふれた仲間  
たちを増やしていかなければならない。そう考えて地元  
の先輩方とのつながりを大切に、地域の活動に参加する機  
会を増やしてきました。地元を盛り上げるためには、山上  
木工で頑張るだけでなく、地域のみなさんと協力しなく

てはいけないと気づいたんです。

## 津別町を盛り上げるべく 新規事業をスタート

**川島** 津別町の方々の気持ちを鼓舞したい、そういう想い  
もあつたんですね。山上さんが立ち上げられた「TSKOOL  
(ツクール)」というスペースもその一環なのでしょうね。

**山上** 「TSKOOL」は津別町にある旧活汲小学校をリノ  
ベーションしたスペースです。「TSKOOL」という名前は、津  
別町のある「OKHOTSK(オホーツク)」と学校の  
「SCHOOL(スクール)」を組み合わせ、ものづくりの「つく  
る」という意味を込めて名づけました。現在は主に弊社の  
ショールームとして運営していますが、将来的には木工教室  
などを開催して、もう一度、学校としての機能をよみがえら  
せたいと考えています。ロゴは建具の扉をイメージしてデザ  
インしていますが、扉を大きく開いて津別町の住民のみな  
さんに活用してもらえような場所にしていきたいですね。

**川島** ショールームには木工家の高橋三太郎さんとお父様  
が立ち上げた山上木工の自社ブランド「ISU-WORKS(イ

スワークス」の製品が展示販売されていると伺っています。そのブランドについて詳しく教えていただけますか。ブランドを設立して10年が経ちますが、海外展開をするなど大きく成長されているようですね。

**山上** 現在の山上木工の主な事業は木材加工ですが、実は祖父の代から一般向けの家具も作っています。そこで、父がオリジナル家具ブランドをしっかりと確立したいと考えて、「ISU-WORKS」を立ち上げて、現在は主に椅子を中心にとした家具を製造しています。販売当初は年間80脚程度であった生産台数も、現在は国内では60店舗、海外では香港で5店舗、フランスで1店舗で製品を取り扱っていたいていて年間約1400脚を納品させていただいています。公共施設などから大きな発注もいただけるようになり、ブランドの成長を実感しています。

**川島** 家具のサブスクリプションサービスを行う会社も新たに設立されたそうですね。

**山上** 2020年に「株式会社The Goods(ザグッズ)」という会社を立ち上げました。オホーツク地域に住む方々限定で家具のレンタル・サブスクリプションサービスを行っているほか、主に道東エリアの優れた日本の製品を世界へお届け

するための貿易仲介業も手がけています。こうした取り組みを通して、津別町から世界に向けて発信していくことができると思っています。

**川島** 山上さんのこうした様々な取り組みが各方面で評価されるようになったとお聞きしています。

**山上** おかげさまで表彰していただく機会も多くなりました。ローカルでも大きな可能性があることを強く感じた経験でした。

## 一週間で練り上げた メダルケースのデザイン

**川島** そして、近年のビッグニュースといえば、やはり「東京2020オリンピック・パラリンピック」のメダルケースを製作したことかと思えます。応募締め切りまでの期間がとても短かったとお聞きしました。どのような想いで応募されたのでしょうか。

**山上** 締め切りまで一週間しかない時に、メダルケースの話を知ったのですが、誰と組むかと考えた時に、以前一緒に仕事をしたプロダクトデザイナーの吉田真也さんしか

いないと思いますすぐに連絡を取りました。彼とならやり遂げられると直感したのです。彼と共にまさに不眠不休でコンセプトを練り、何度もリデザインを繰り返しながらデザイン案を形にするハードワークを乗り越えました。

当時は自分の中に、まだどこかでローカルの企業なんだからという引け目があり、正直、選ばれると思っていませんでした。しかし、挑戦する気持ちは大切にしていたので全力で取り組みました。

**川島** 正式に採用されたという連絡があった時はどのようなお気持ちでしたか。

**山上** 本当に信じられませんでした。「落札候補に選ばれました」というメールが来たのですが、それを見て「落選」と勘違いした父から「ほらお前、落ちただろ!」と言われてしまいました。それくらい誰も期待していなかったんです。これからどんなことが起きるんだろうとわくわくする一方で大きな不安もありましたが、やるしかないと腹をくくりました。

**川島** それから本格的に製作がスタートとなるわけですが、コロナ禍で大会が1年延期となりました。製作作業はど



「東京2020オリンピック・パラリンピック」で使用されたメダルケース

のように進められたのでしょうか。

**山上** 中止となり無かったことにははしたくないという気持ちは正直ありました。日々様々な報道がされていますが、私はとにかく、選手のみなさんに完璧なものを届けるべく、粛々とものづくりに集中するしかないと考えていました。自分がやろうと決めたことですから、一番大変で責任を取らなければならない部分は、自分がやるべきだと考え、精度が必要な下地の加工はすべて、工作機械を使って僕が行いました。研磨や細かい加工は優れた手先の技術が必要でしたので、ベテランの職人の方々に力を貸していただきました。

**川島** メダルケースを製作されるうえで大切にされたことやこだわった部分を教えてくださいませんか。また、大会中にメダルケースを手にした選手の姿を見てどう思われましたか。

**山上** 素材には北海道産のタモ材を選びました。タモ材はバットやラケットなどに使われるなどスポーツに馴染み深い素材ですし、非常に堅いことからアスリートの不屈の精神も表現しています。また、タモ材を染めている藍色は日本伝統の色であり、勝色とも呼ばれる縁起のいい色です。形状は丸にこだわりました。日の丸をイメージしていると同時に、ケースを開いた時に丸が並んだ様子がオリンピックのロゴを

彷彿させるデザインにしています。自分が思いを込めて作った製品が世界の一流選手に届くことに興奮しましたし、感動もしました。全部の試合を録画したくらいです。こんな経験をさせていただき本当にありがたく思っています。

**川島** メダルケースを製作されたことで、会社に変化はあったのでしょうか。

**山上** 職人の方々は今まで以上に自信をつけていただいたように感じますし、会社全体がひとつにまとまったような気がします。父の厳しさは変わらずですね。「メダルケースひとつで調子に乗るな」と言われています。実際、父がこの地域で会社経営しているように長く続けていくことの方がよほど大変ですからね。

## ド・ローカルこそチャンスしかない

**川島** 最後に、山上さんがこれから目指すビジョンをお伺いできればと思います。

**山上** 昔は洋服の流行など都会の情報が地方に伝わるまでに数年のタイムラグがありました。僕自身、新しいモノや情報が手に入る都会に憧れがありました。時代は変化し

て、今ではインターネットでどこにいても最新の情報が手に入れますし、どんなモノでも手に入る。そうになると、都会の人が見られない美しい景色を眺めてすごしたり、本物の食材を味わえるなど、地方に暮らすことがむしろアドバンテージになると考えています。僕は最近、「ド・ローカルこそチャンスしかない」という言葉をよく使っています。ローカルだからこそ優れている、ローカルだからこそ何かできることがあると考えています。ですから、普段から「津別町の山上木工です」と地域をアピールすることを欠かしません。地元のことをもっと誇りに思っけて発信して欲しい。そういう想いで、若い人たちにも「ド・ローカル」の魅力を伝えていきたいと思っています。

**川島** これからのますますのご活躍をお祈りしています。私もいつか津別町に行ってみたいと思います。

**山上** ありがとうございます。今ではもう寒くてストーブを焚いていますが、ぜひ暖かい時期にお越しください。

